

相模川下流左岸域における弥生時代後期前半の様相

－倉見才戸遺跡調査成果の検討－

中 村 哲 也

- | | |
|--------------|------------------------------|
| 1. はじめに | 3. 倉見才戸遺跡の概要 |
| 2. 研究略史 | 4. 倉見才戸遺跡出土の弥生後期土器群－神崎遺跡との比較 |
| (1) 神崎遺跡発見以前 | 5. 目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の集落遺跡 |
| (2) 神崎遺跡発見以後 | 6. おわりに |

1. はじめに

神奈川県寒川町倉見才戸遺跡の調査は1991年から1999年にわたって4回実施され、その結果東海系土器（東三河・西遠江系土器）を主体とする弥生時代後期の環濠集落が発見された（木村・田村1992、小林1999、中村2001）。

倉見才戸遺跡が所在する相模川下流左岸（東岸）域では、近年の調査事例の増加によって、東三河・西遠江系土器を主体とする弥生時代後期の遺跡が近接・集中している様相が明らかになってきており、とくに当該期集落遺跡の分布は、相模川水系の目久尻川・小出川下流域において顕著である（第1図）。

本稿では倉見才戸遺跡の調査成果を踏まえ、同じ目久尻川水系であり、約2.0kmの距離内に近接する綾瀬市神崎遺跡出土資料との比較・検討、及び周辺の当該期集落との検討を加えることにより、相模川下流左岸、とくに目久尻川・小出川下流域の弥生時代後期前半の様相について考察する。

2. 研究略史

1989年、綾瀬市神崎遺跡の調査によって、多量の東海系土器を出土する弥生時代後期前半の環濠集落の存在が明らかになり、その内容はいち早く岡本勇によって紹介された（岡本ほか1990・神崎遺跡発掘調査団1990）。岡本は神崎遺跡出土土器と愛知県三河地方の土器群との類似性を指摘し、集落の成立に三河系集団が関与している可能性を想定された。

その後の報告で（小滝・村上他1992）、神崎遺跡は出土土器の90%以上が「外来系土器」（東海系土器＝東三河・西遠江系土器）によって構成される短期間の集落であることが明らかになり、改めて岡本は東三河・西遠江からの「人間集団の移動」を想定され、今後の課題とし

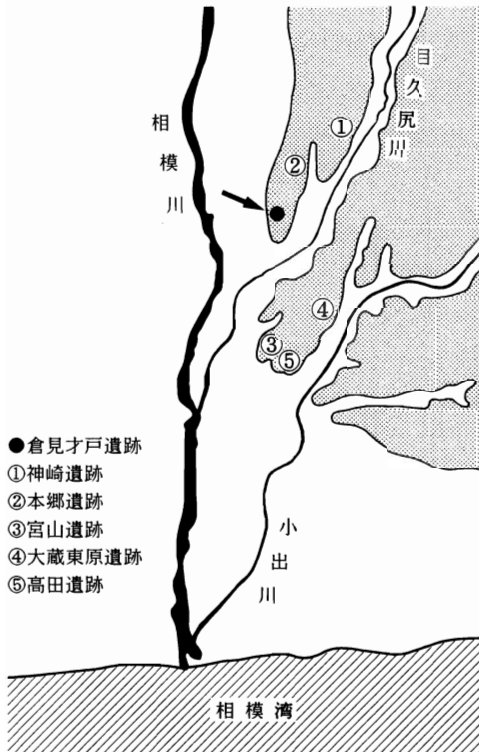
て、さらに掘り下げた土器論・集落論・地域論の必要性を主張された(岡本1992)。これによって、神崎遺跡の調査以前に報告されていた東海系土器の意義も再検討されるようになり、相模の東海系土器についての活発な論議が行われるようになった。

いずれにしても神崎遺跡の調査成果は、相模の弥生時代後期土器研究における大きな画期と考えることができる。ここでは神崎遺跡発見以前と発見以後に分けて、研究略史を概観する。

(1) 神崎遺跡発見以前

相模湾沿岸地域の弥生時代後期の土器様相に、東海地方的な土器が存在していることは、古くから赤星直忠、古賀寿などにより指摘されている(赤星1955・古賀1959)。

神沢勇一は相模湾沿岸地域と東京湾沿岸地域との弥生時代後期の土器様相の差異に着目し、前者は東海地方的な土器が主体であることに言及して「相模湾北西部沿岸地域」という独自の土器文化圏を設定した。さらに「相模湾北西部沿岸地域」の東海地方的な土器は、駿河湾沿岸地域の土器とともに、伊勢湾周辺地域の「寄道式土器」、「伊場式土器」に比定しうる土器を多量に伴出するとし、これらに対して「海路による直接的な伝播」の可能性を示唆している(神沢1966)。



第1図 目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の集落遺跡(1/15万)

また、湯川悦夫・加納俊介は、南関東地方出土の東海系の弥生時代後期土器、および「古式土師器」を東海地方西部の編年観に準拠して分析し、欠山～元屋敷期の土器様相との類似性を指摘している(湯川・加納1972)。

さらに、岡本勇は弥生時代後期の畿内系櫛描文土器が東日本へ波及するルートの一つに、尾張―東海道―相模湾岸地域という流れを想定し、櫛描文土器を含む相模湾岸地域の弥生時代後期土器群は、東京湾沿岸地域よりも伊豆以西(東海地方)と親近性を持つとし、「相模湾岸型式」という土器分布圏を設定した。また、茅ヶ崎市篠山遺跡出土の外來系土器(高坏)に対して、遠江・三河地方に故地を求めている(岡本1976・1980・1981)。

その後、比田井克仁は南関東地方における弥生時代後期伊勢湾系(山中式・欠山式)土器について論じ、後期前半の山中式系土器を伴出する遺跡が相模湾岸・相模川中・下流域に主に分

布するとし、これを南関東における弥生時代後期の伊勢湾系土器の最初の到来と結論づけた。さらに山中式系土器が東遠江・駿河地域に波及しない点から、これらは「いきなり相模湾岸に到来」するとしている（比田井1987）。

これらは資料的蓄積に乏しい当時において、いずれも的確な論考として評価される。その後、前述の神崎遺跡の発見により相模の東海系土器についての、多種多様な論考が発表され現在に至るわけだが、それらが上記の先達の成果を礎に成り立っている点は言うまでもない。

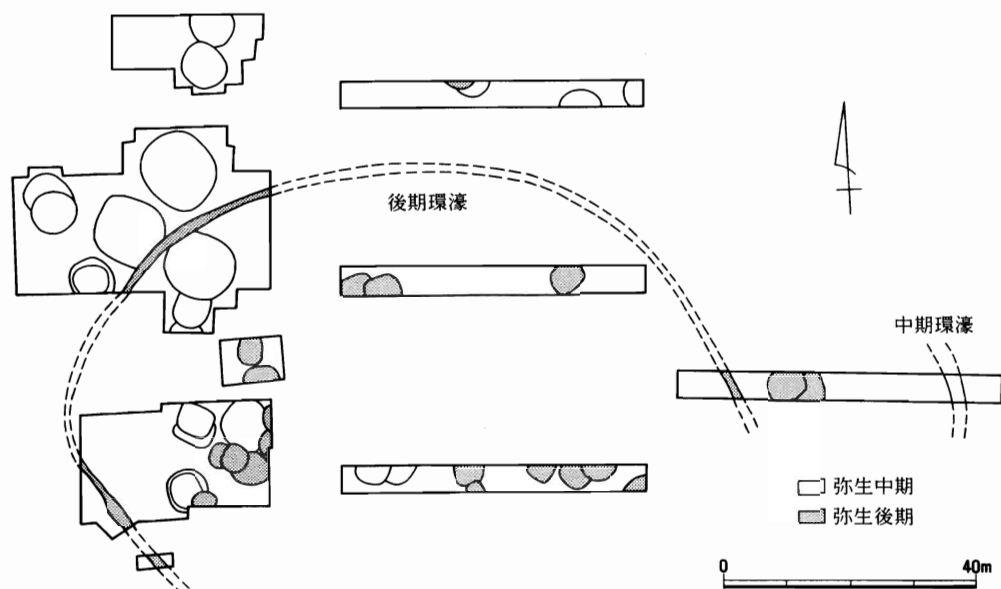
（２）神崎遺跡発見以後

神崎遺跡の発見と相前後して、1991年に東海埋蔵文化財研究会によって「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器」と題したシンポジウムが行われ（東海埋蔵文化財研究会1991）、後期弥生土器の編年、あるいは土器移動の問題などについての討論がなされた（東海埋蔵文化財研究会1993）。相模地域については、立花実により相模川を挟んだ両地域（東岸域・西岸域）の東海系土器の受容について述べられている。その中で立花は、前述の神崎遺跡に代表される相模川流域の弥生後期東海系土器の様相を比較・検討し、相模川東岸域には三河・西遠江の山中式系土器が、相模川西岸域は東遠江の菊川式系土器が受容されることを指摘している。さらに、前者は弥生時代後期前半の後葉に「直接的な人の移動の結果」もたらされるのに対し、後者には後期後半の駿河地方を経由した波及を考え、「直接的な人の移動は想定できない」と結論付け、両地域（東岸域・西岸域）における東海系土器の受容の差異（故地、経路、時期）について述べられている（立花1993）。

その後、1990年代には海老名市本郷遺跡（合田・及川・池田1995）、寒川町大蔵東原遺跡（小林1993・1997）、寒川町宮山遺跡（秋山1998）、寒川町高田遺跡（中村・立花2000）、寒川町倉見才戸遺跡などの東海系土器（＝東三河・西遠江系土器）を主体とする弥生時代後期集落の報告がなされ、相模川下流左岸域の資料は次第に充実してきた。

さらに、2001年には西相模考古学研究会によって「弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～」と題したシンポジウムが行われた（西相模考古学研究会2001）。このシンポジウム資料集は、論攷・掲載資料ともに非常に充実したもので、相模湾沿岸の弥生時代後期の研究についての、現段階における一つの到達点として、評価されるべきものである。相模川東岸域の様相については池田治によって土器と集落についての論考が発表され、目久尻川・小出川流域の弥生時代後期の様相は、土器組成そのものが東海系である集落が多く、集落成立時に「集団での移住」、あるいは「村ごとの移動」という状況があったとしている（池田2001）。

このように、神崎遺跡発見以後の各論考・報告により、相模川左岸の目久尻川・小出川流域では、集落の成立期と考えられる弥生時代後期前半に、東三河・西遠江の集団的関与（＝人の移動）があったことは、ほぼ一致した見解として認識されている。また近年では、故地の系統をさらに細分し（東三河系と西遠江系）、その差異による各集落の類型化（西川2001）といっ



第2図 倉見才戸遺跡弥生時代遺構配置図 (1:1, 200)

た、新たな試みもなされている。

3. 倉見才戸遺跡の概要

最近筆者が調査した倉見才戸遺跡の概要について紹介する(中村2001)。遺跡は県央部の寒川町倉見に所在する。県内最大河川である相模川下流左岸域に属し、相模川の合流点に近い目久尻川右岸の低位丘陵上に立地する。標高は約15m前後、沖積面との比高差は約5mを測る(第1図)。

本遺跡の調査面積は2002年1月現在で約2,700㎡に及ぶが、いずれも断片的な調査であり、遺跡の全体像を把握するには至っていない(第2図)。

遺跡の主体時期は弥生時代中期後葉、および後期である。中期後葉宮ノ台式期では環濠集落(環濠1条、住居址24軒)が発見されている。環濠の幅は約3.1m、深度は約1.5mを測る。遺構の分布状態から、集落の規模は東西径で140m以上と考えられ、後期集落よりも広範囲にわたるものと推定される。各住居址出土の壺形土器に文様の簡素化(文様帯は頸部中心、文様構成は縄文主体)が看取されるため、時期的には宮ノ台式期の末葉に位置付けられるものと推定される⁽¹⁾。後期では東三河・西遠江系土器を主体とする環濠集落(環濠1条、住居址23軒)のほぼ北半部(東西径約120m、南北径不明)が確認された。環濠の幅は約1.5～2.5m、深度は約1～1.5mを測る。環濠内面積は約10,000㎡前後と推定される。集落の中心となる時期は後期前半(山中式期)だが、後期後半(欠山式期)まで継続するものと推定され、客体的に東

京湾沿岸系土器が含まれる⁽²⁾。なお、前述の宮ノ台式期の集落とは時期的な空白が想定されている⁽³⁾。

4. 倉見才戸遺跡出土の弥生後期土器群－神崎遺跡との比較

倉見才戸遺跡の弥生時代後期の集落の中で、最も内容的に充実している第4次調査17号住居址出土の土器群（第3図）をとりあげ、神崎遺跡の土器分類（第4図）（村上1992・小滝1996）に準拠して比較・検討する。17号住居址出土の土器群は、小破片類を含めてほぼ全てが東三河・西遠江系土器に属するものであり、神崎遺跡と極めて類似した土器様相を呈している。

1～4は複数の櫛描波状文・横線文により文様が描出される壺形土器で、4には扇状文がみられる。いずれも頸部は「く」の字状に強く屈曲し、外反しながら肥厚する単口縁へと続く。胴部はほぼ球胴形を呈する。神崎遺跡の分類では、壺B類に該当する。

5・6も櫛描波状文・横線文で文様が描出される壺形土器だが、1～4に比して頸部の屈曲が弱く、胴部は下膨れ状を呈する。5は胴部下位に稜を持つ。壺E類と推定される。

7は無文の壺形土器で、やや下膨れの球胴形を呈し、頸部は直線的である。壺F類に該当するものと推定される。

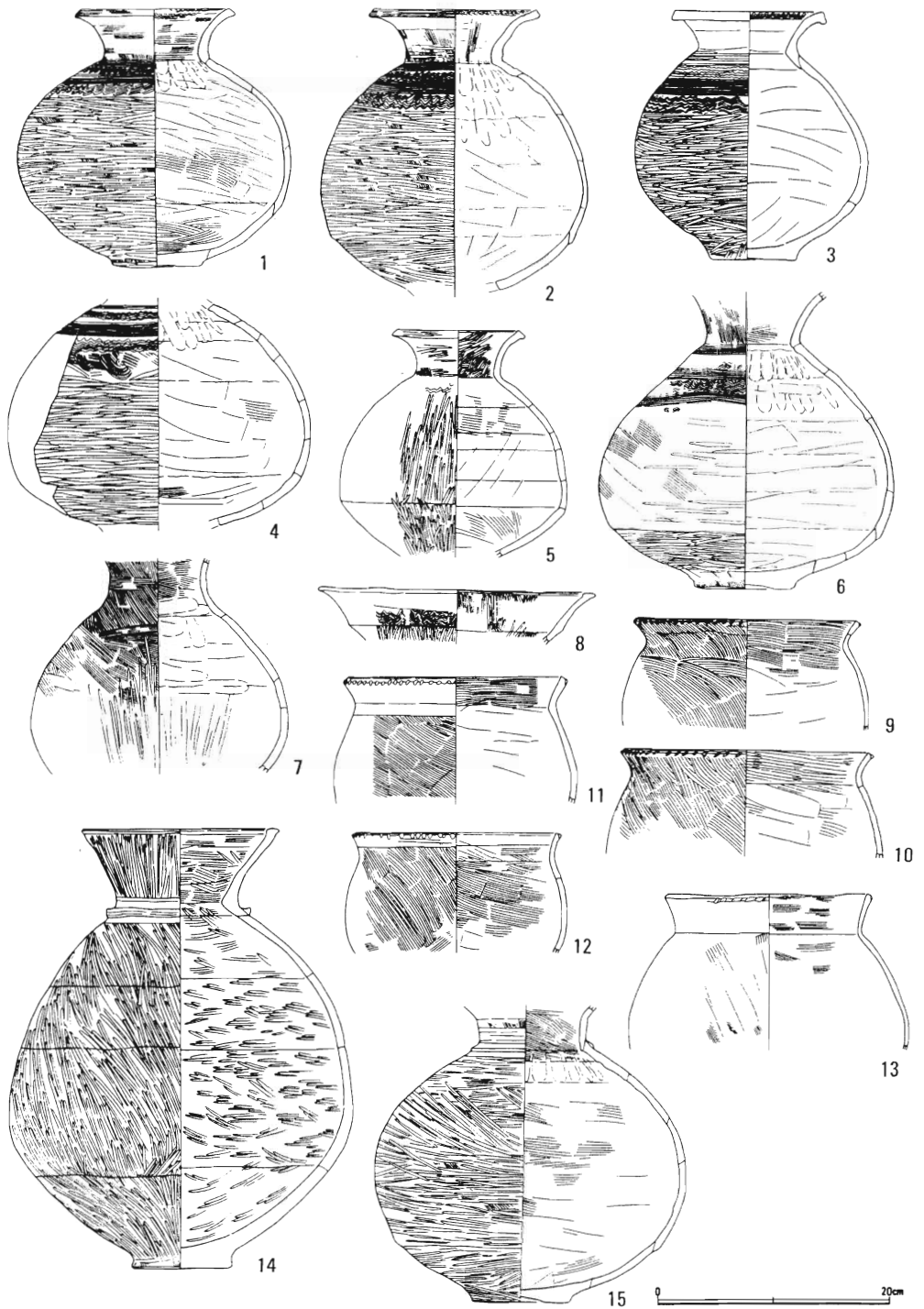
8は坏部の上半が外反する高坏で、櫛描波状文が施される。高坏I－A1類と推定される。

9～13は口縁部が「く」の字状に屈曲する台付甕である。9～12は胴部中位に最大径を有し、胴部の張りはやや弱い。また、ハケメ調整が顕著にみられる。13は口縁部が直立気味で、胴部が強く張る。9・10は口唇部面取り後にハケ状工具による斜方向からのキザミ、11・12は棒状工具による上方からのキザミ、13はへら状工具による斜方向からのキザミがそれぞれ施される。9～12は甕B類に該当する。13は類例はみられるが、類型化されていない。

14・15は無文の壺形土器である。山中式に後続する後期後半欠山式に比定されるもので、前述の1～13よりも時期的にはやや下る資料である。14は口縁部がやや内傾する単口縁を呈し、頸部は屈曲し、断面三角形の突帯が巡る。胴部はやや下膨れの球胴形を呈する。15は直線的に立ち上がる頸部に断面三角形の突帯が巡り、胴部は球胴形を呈する。いずれも神崎遺跡では出土していない資料だが、後述する宮山遺跡、大蔵東原遺跡などで類例がみられる。

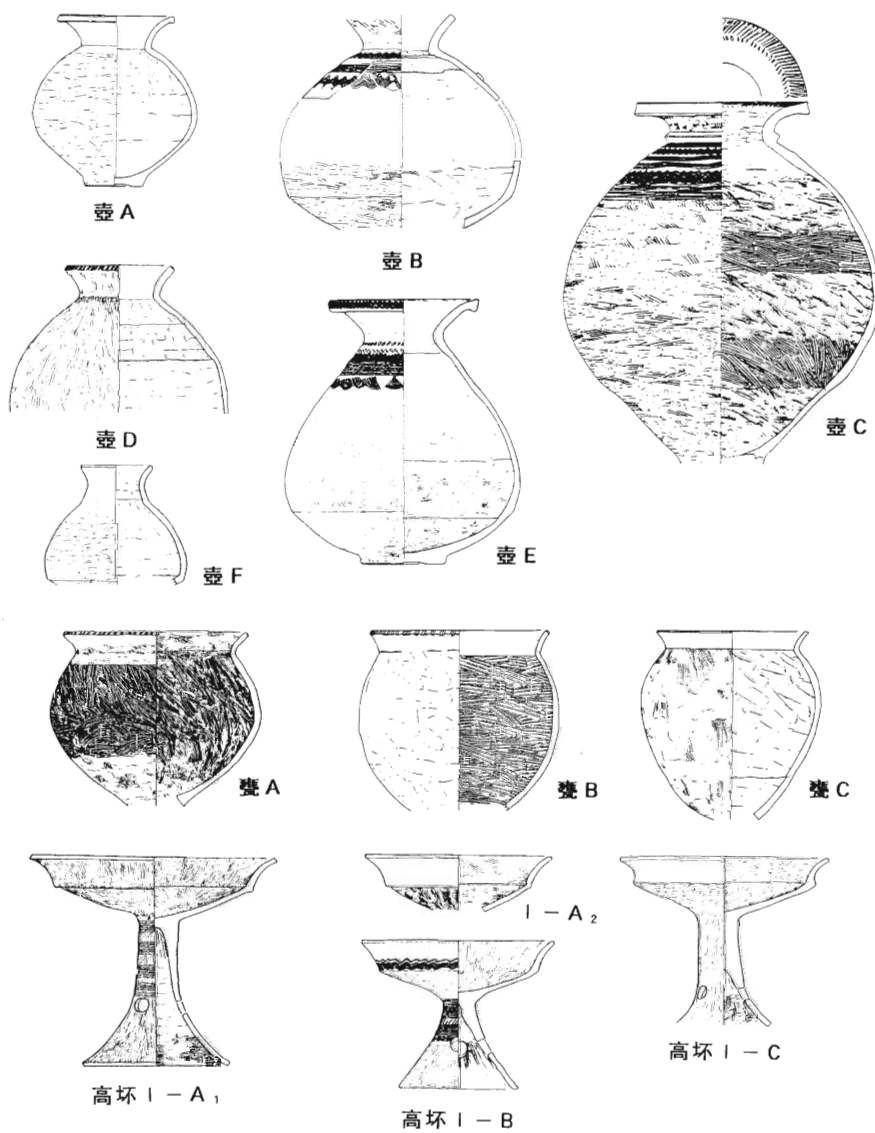
以上、倉見才戸遺跡の代表的な出土土器を概観したが、後期前半の資料については神崎遺跡出土土器との共通性が看取される。さらに、両集落出土の土器群と出自地域（東三河・西遠江地域）の土器群に形態的な変容は殆ど認められない。つまり両集落はほぼ同時期（弥生時代後期前半）に本地域に到来した同系統（東三河・西遠江系）集団によって形成された、近接（約2km）する環濠集落ということになる。上記の事象から、集落成立期における両集落の有機的な関連が想定されるとともに、同一集団からの分化という可能性も考えられよう。

また後期後半の資料（第3図－14・15）は、神崎、倉見才戸の両集落の存続期間の相違を考



第3図 倉見才戸遺跡4次調査17号住居址出土土器

相模川左岸（東岸）域、とくに目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の様相（中村）



第4図 綾瀬市神崎遺跡の土器分類

える上で注意を要するが、現段階ではその評価については慎重にならざるを得ない⁽⁴⁾。

5. 目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の集落遺跡

倉見才戸遺跡と神崎遺跡を包括する目久尻川・小出川下流域の、主な弥生時代後期前半の集落遺跡（墓域含む）について概観する⁽⁵⁾。各遺跡は径約4kmの範囲に近接・集中している（第1図）。なお、文中の遺跡番号は第1図に対応する。

①綾瀬市神崎遺跡（第5図）

目久尻川右岸の台地上に立地し、標高は約24mを測る。倉見才戸遺跡からは北東約2.0kmに位置する。後期前半の環濠集落（環濠1、住居址6、土器捨て場）で、環濠は南北径103m、東西径65m、総延長270mを測り、環濠内面積は約5000㎡と推定される。出土遺物の90%以上を東三河・西遠江系土器が占める（小滝・村上他1992）。

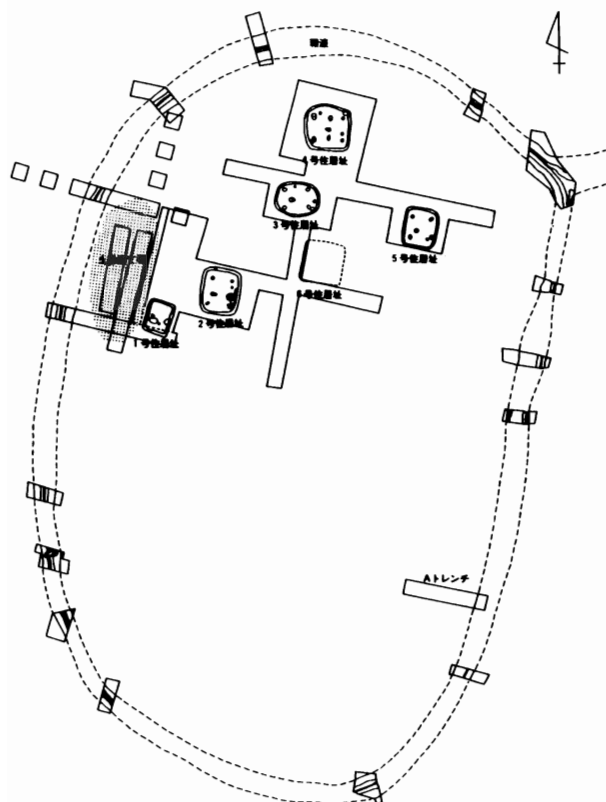
②海老名市本郷遺跡（第6図）

目久尻川右岸の台地上に立地し、標高は約22mを測る。倉見才戸遺跡からは北東約1.0km、神崎遺跡からは南西約1.0kmを測り、倉見才戸遺跡と神崎遺跡のほぼ中間地点に位置する。弥生時代後期前半から古墳時代前期まで継続する（弥生時代後期環濠2、弥生時代後期～古墳時代前期住居址約450、方形周溝墓53など）集落址で、集落成立時期は前述の神崎遺跡とほぼ同

時期であり、環濠集落の形態を備えている。つまり、神崎・本郷・倉見才戸の同時期各集落は、同一河川右岸沿いにわずか1kmの距離をおいて分立していたことになる。出土遺物は東三河・西遠江系土器を主体とし、とくに西遠江系の要素が強い。また、東京湾沿岸系土器が客体的に含まれ、さらに東遠江系、北関東系、中部高地系土器なども散見される（合田・及川・池田1995）。集落の規模・豊富な遺物内容などから、人や情報の集積地・交流拠点となり得る大規模・長期間の集落であった可能性が考えられる（池田2001）。

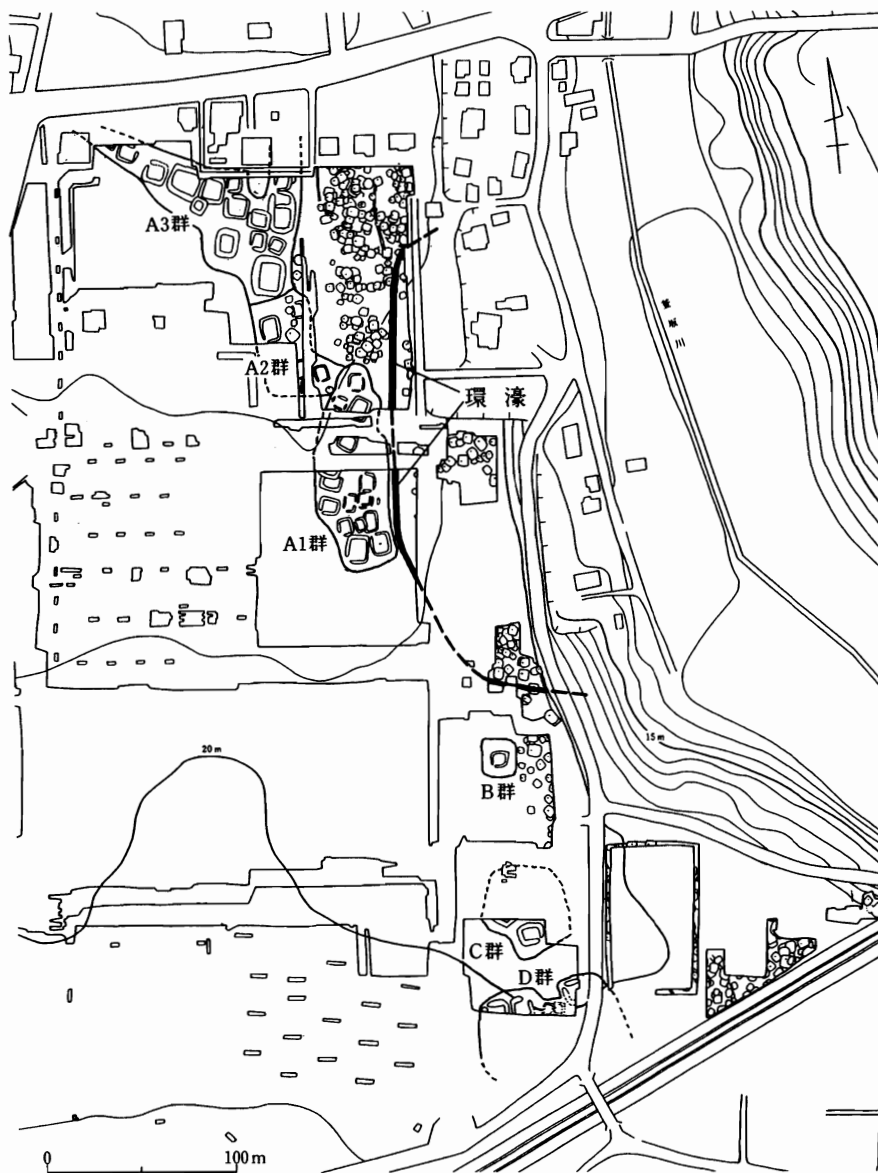
③寒川町宮山遺跡

目久尻川と小出川に挟まれた台地上の西端に立地し、標高は約17mを測る。倉見才戸遺跡からは南方約2.7kmに位置する。弥生時代後期前半から後半の方形周溝墓群（8基）で、東三河・西遠江系土器を主体



第5図 綾瀬市神崎遺跡(1:1,000)

相模川左岸（東岸）域、とくに目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の様相（中村）

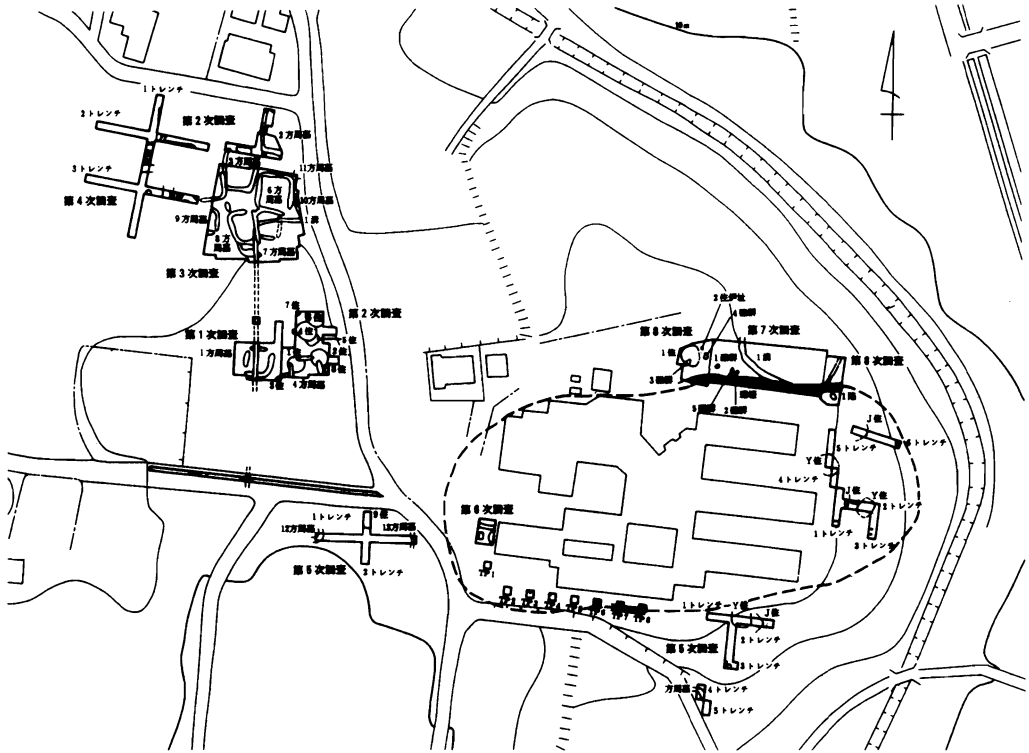


第6図 海老名市本郷遺跡(1:4,000)

とする（第8図）。報告では東海地方からの回数を重ねた交流もしくは波及の可能性が述べられ、さらに近接地に当該期集落の存在を想定している（秋山1998）。

④寒川町大蔵東原遺跡（第7図）

小出川右岸の台地上に立地し、標高は約19mを測る。倉見才戸遺跡からは南東約2.2kmに位置する。弥生時代後期前半～後半の住居址、方形周溝墓、環濠などが発見されている。東三河・西遠江系土器を主体とするが、後期前半は東三河系、後半は西遠江系の要素が強い。また後期後半には客体的に東京湾沿岸系土器などが含まれる（第8図）。後期前半には環濠の中層に多



第7図 寒川町大蔵東原遺跡(1:2,000)

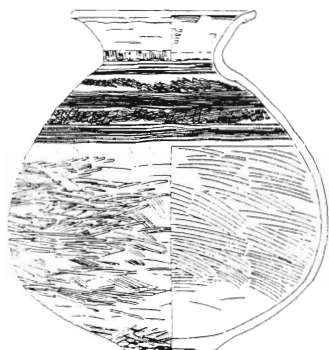
数の遺物が廃棄され、後半には環濠外にも集落が形成される（小林1993・1997）。

⑤寒川町高田遺跡

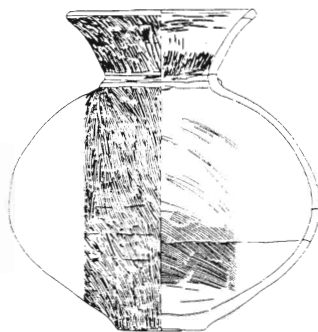
目久尻川と小出川に挟まれた台地上の南端に立地し、標高は約25mを測る。倉見才戸遺跡からは南東約2.8kmに位置する。弥生時代後期～古墳時代前期の住居址、方形周溝墓、環濠などが発見されている。部分的な報告のため、個別の遺構の時期は不明であるが、環濠からは後期前半の東三河系土器、方形周溝墓群は後期後半の西遠江系土器が主体的に出土し、後者には東遠江系、東京湾沿岸系土器などが伴うとされている。後期前半から後半にかけて東海地方との継続的な交流が行われる点から、前述の本郷遺跡に類似した拠点集落である可能性が指摘されている（中村・立花2000）。

以上のように目久尻川・小出川下流域の弥生時代後期前半の集落遺跡は、いずれも東三河・西遠江系土器を主体とする内容であり、他系統土器を主体とする当該期集落は未発見である。換言すれば目久尻川・小出川下流域の弥生時代後期前半の様相は東三河・西遠江系の集落のみによって成立しているといっても過言ではない。

相模川左岸（東岸）域、とくに目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の様相（中村）



2号方形周溝墓

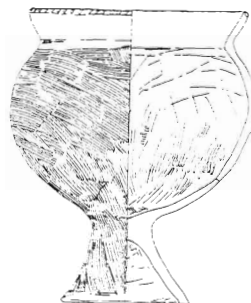
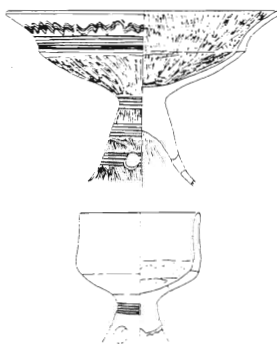
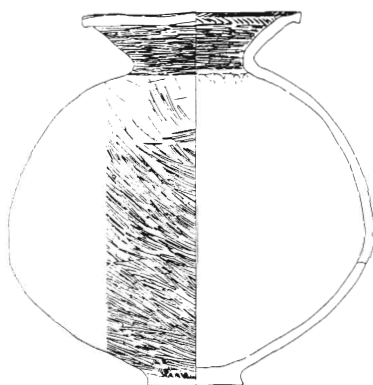


3号方形周溝墓

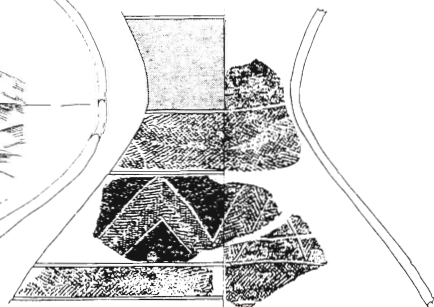
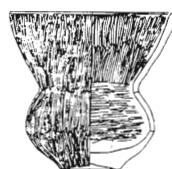
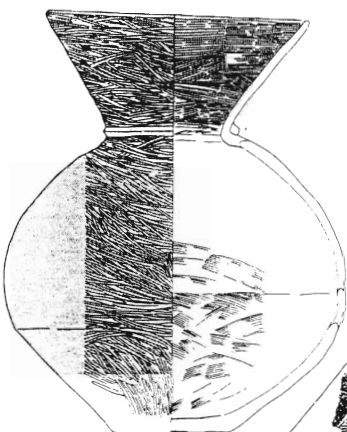
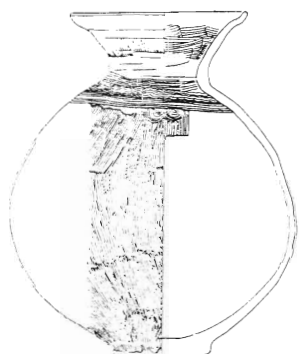


5号方形周溝墓

宮山遺跡出土土器



大蔵東原遺跡環濠出土土器



大蔵東原遺跡方形周溝墓出土土器

0 20cm

第8図 宮山遺跡・大蔵東原遺跡出土土器群

6. おわりに

以上、目久尻川・小出川下流域の弥生時代後期前半の地域的様相について述べてきた。倉見才戸遺跡と神崎遺跡の出土土器群の比較では、両者は東三河・西遠江地域を出自とする櫛描文系壺・高坏、あるいは「く」の字状口縁甕を主体とする同時期・同系統の集落であることが明らかになった。また、目久尻川・小出川下流域の弥生後期前半の集落遺跡の検討では、現段階で5遺跡を数える当該期集落の全てが、東三河・西遠江系の環濠集落であり、さらに集落間約1～2.8kmの距離で、径4kmの範囲に分立しているという状況が確認された。これらは目久尻川・小出川下流域を中心とした地域的なまとまりとして把握されよう。

上記の事象から、弥生時代後期前半という限られた時期に、相当数の東三河・西遠江系の集団が、連続的・継続的に相模川河口に到来し、最初の支流にあたる目久尻川・小出川の下流域の台地縁辺部に、短時日のうちに近接する複数の環濠集落を形成していたということになる。これらは時間的あるいは空間的な在り方から、ある一定期間は同時併存していた可能性が考えられる。

また、環濠の防備施設的な性格を重視するならば、相模地域からみれば外来系となる東三河・西遠江系の集団は、集落形成当初は新天地における在地系集団などとの緊張関係を意識していたという状況が想定される。この緊張感はいち早い集落の分散を促した一つの要因と考えられよう。さらに、近距離に分立した各環濠集落が有機的な関連を持っていたことはほぼ確実であり、集落間に相互の補完関係が存在していたものと推定されよう。

その後、環濠に象徴される集落成立段階の緊張感は、集落の継続とともに徐々に弛緩し⁽⁶⁾、後期後半までには環濠の機能は概ね失われるものと考えられる。

最後に小稿をまとめるにあたって、戸田哲也先生・河合英夫氏には御指導、御教示賜った。記して感謝する次第である。

註

- (1) 矢戸編年(矢戸1992)ではV期、安藤編年(安藤1996)ではVI期に位置付けられる。
- (2) 筆者は倉見才戸遺跡第4次調査報告書(中村2001)で、後期集落の時期について「後期中葉」と位置付けたが、本論にて「後期前半から後期後半の集落」と訂正させて頂く。また、時間的な制約もあり、後期土器の比率を数値化することは不可能であったが、主体(東三河・西遠江系):客体(東京湾沿岸系)という関係についてはご理解頂きたい。
- (3) 倉見才戸遺跡は中期後葉宮ノ台式集落と後期前半東三河・西遠江系集落が同一地を占地している数少ない事例である。
- (4) 神崎遺跡・倉見才戸遺跡ともに集落全体の一部の調査に過ぎないため、集落の継続期間を限定することは現時点では慎重にならざるを得ない。
- (5) 茅ヶ崎市篠山遺跡(岡本1980・1981・1990)、同市北稜高校東方遺跡(岡本1980)、藤沢市No.208遺跡(寺田1997)などについては、集落址と判断できないため除外している。
- (6) 本郷遺跡の多種多様な遺物様相、あるいは大蔵東原遺跡の環濠内遺物出土状況・住居址分布状況などはその最たる例といえよう。

引用・参考文献

- 赤星直忠 1955 「各地域の弥生土器 南関東」『日本考古学講座4 弥生文化』河出書房
- 秋山重美 1998 『宮山遺跡発掘調査報告書』宮山遺跡発掘調査団
- 安藤弘道 1996 「南関東地方（中期後半・後期）」『YAY！（やいっ！）』弥生土器を語る会
- 池田 治 1996 「相模の『く』字状口縁甕」『西相模考古』5 西相模考古学研究会
- 池田 治 1997 「海老名本郷遺跡の集落変遷について」『西相模考古』6 西相模考古学研究会
- 池田 治 2001 「相模川東岸地域の後期の様相」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』（資料集）西相模考古学研究会
- 伊丹 徹・池田 治 2000 「神奈川県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会
- 岡本 勇 1976 「第3章第二節 弥生農耕の発展」『神奈川県史 通史編1 原始・古代・中世』神奈川県
- 岡本 勇 1980 「考古学的にみた茅ヶ崎」『茅ヶ崎市史3 考古・民俗編』茅ヶ崎市
- 岡本 勇 1981 「考古 第2章 農耕の開始と発展」『茅ヶ崎市史4 通史編』茅ヶ崎市
- 岡本 勇 1990 「篠山遺跡の弥生土器のもつ意味」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査10周年記念集』10周年記念集編集委員会
- 岡本 勇 1992 「神崎遺跡の意義」『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告2 綾瀬市教育委員会・神崎遺跡発掘調査団
- 岡本 勇ほか 1990 「座談会・大和市の原始・古代を考える」『大和市史研究』16 大和市
- 神崎遺跡発掘調査団 1990 「弥生時代の環濠集落址を掘る」『市史だより』7 綾瀬市
- 神沢勇一 1966 「弥生文化の発展と地域性 関東」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房新社
- 木村 勇・田村良照 1992 「寒川町倉見日本鋳業（株）ひかり社宅内遺跡」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会要旨』神奈川県考古学会
- 合田芳正・及川良彦・池田治 1995 『海老名本郷（X）』富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
- 古賀 寿 1959 「相模野の櫛目文土器」『西郊文化』18 西郊文化研究会
- 小滝 勉・村上吉正ほか 1992 『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告2 綾瀬市教育委員会・神崎遺跡発掘調査団
- 小滝 勉 1996 「第4章 弥生時代」『綾瀬市史9別編 考古』綾瀬市
- 小林秀満 1999 『倉見才戸遺跡発掘調査報告書－第3次調査－』倉見才戸遺跡発掘調査団
- 小林義典 1993 『大蔵東原遺跡発掘調査報告書』大蔵東原遺跡発掘調査団
- 小林義典 1997 『大蔵東原遺跡第7・8次発掘調査報告書』大蔵東原遺跡発掘調査団
- 小宮恒雄・中村勉 1998 「第5章 弥生時代」『海老名市史1 資料編 原始・古代』海老名市
- 穴戸信悟 1992 「南関東における宮ノ台期弥生文化の発展」『神奈川考古』28 神奈川考古同人会
- 鈴木敏則 1997 「三河・西遠江から見た後期弥生土器・前編」『西相模考古』6 西相模考古学研究会
- 鈴木敏則 1998 「三河・西遠江から見た後期弥生土器・前編 つづき」『西相模考古』7 西相模考古学研究会
- 鈴木敏則 2001 「三河・遠江系土器の移動とその背景」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』（資料集）西相模考古学研究会
- 鈴木保彦 1998 「第四章 弥生時代」『寒川町史6 通史編 原始・古代・中世・近世』寒川町
- 鈴木保彦 1996 「第四章 弥生時代」『寒川町史8 別編 考古』寒川町
- 立花 実 1991 「相模における後期弥生土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動からみた東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会
- 立花 実 1993 「相模における東海系土器の受容」『転機』4
- 立花 実 1997 「土器の移動からみた弥生時代後期の社会」『かながわの弥生時代の社会』神奈川県考古学会

- 立花 実 2001 「相模の後期弥生土器～時間的変遷過程と地域差の意味～」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』（資料集）西相模考古学研究会
- 田村良照 1997 「東相模の弥生時代後期の社会」『かながわの弥生時代の社会』神奈川県考古学会
- 寺田兼方 1997 「No.208遺跡」『藤沢市文化財調査報告書』第32集 藤沢市教育委員会
- 中村喜代重・立花実 2000 「寒川町高田遺跡」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』神奈川県考古学会
- 中村哲也 2001 『倉見才戸遺跡第4次調査発掘調査報告書』倉見才戸遺跡発掘調査団
- 西川修一 1998 「第Ⅱ編第4章第1節 弥生時代」『御屋敷添遺跡第3地点（No.1）第4地点（No.2）第5地点（No.44）高森・一の崎遺跡（No.37）高森窪谷遺跡（No.3）』かながわ考古学財団調査報告33 かながわ考古学財団
- 西川修一 2001 「東海から相模へ～御屋敷添遺跡その後～」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』（資料集）西相模考古学研究会
- 比田井克仁 1987 「伊勢湾系土器の系譜と動向－南関東地方について－」『欠山式土器とその前後』研究・報告編 第3回東海埋蔵文化財研究会
- 松本 完 1993 「東海系土器群の受容と変容」『転機』4
- 村上吉正 1992 「第7章第2節 土器」『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告2 綾瀬市教育委員会・神崎遺跡発掘調査団
- 湯川悦夫・加納俊介 1972 「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学研究会会報』5 小田原考古学研究会